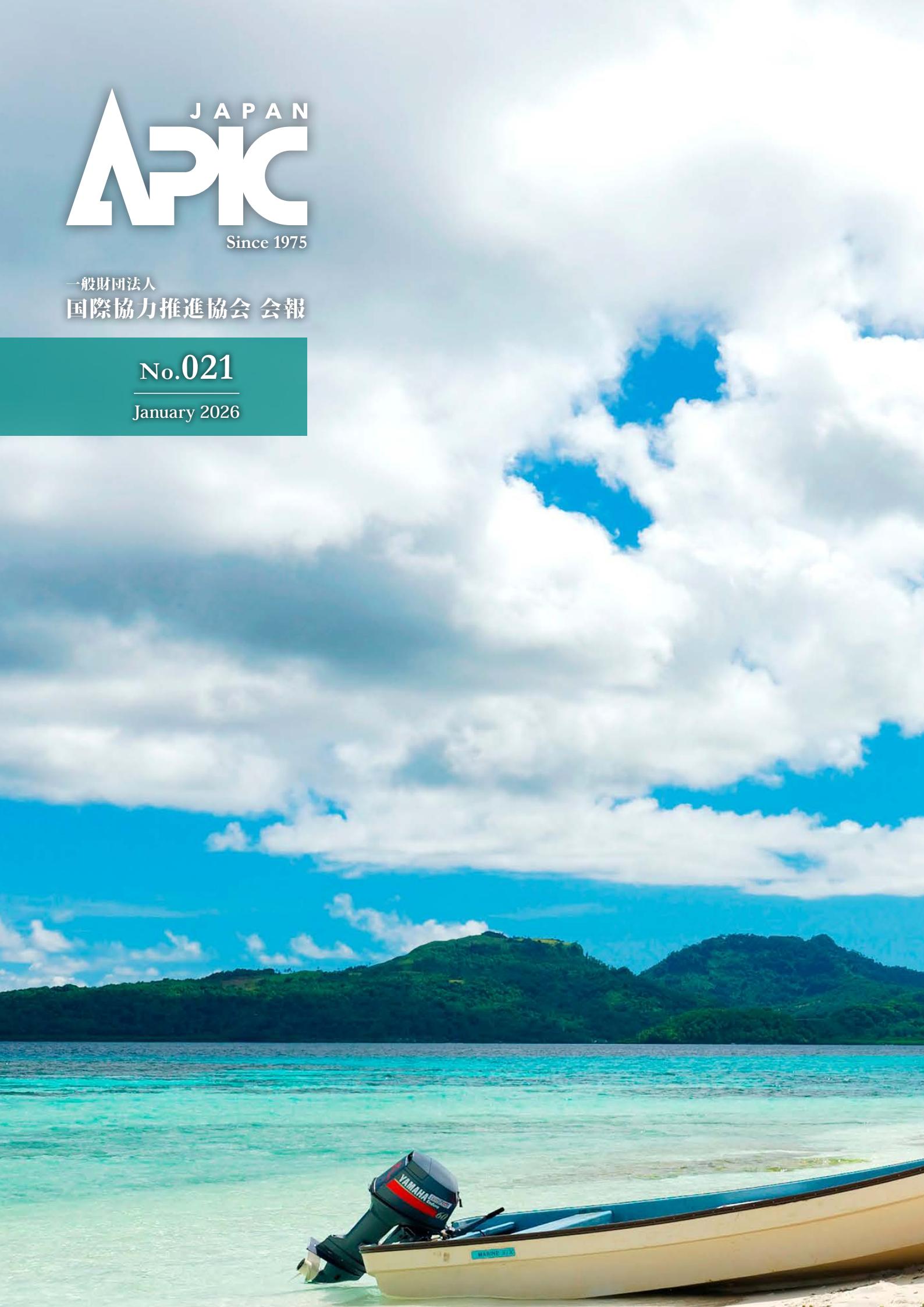




一般財團法人  
国際協力推進協会 会報

No.021

January 2026



# ごあいさつ

新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年は、1年が瞬く間に過ぎた年でした。世界がトランプ関税等に翻弄されました。ウクライナでのロシアによる戦争や中東での戦闘で多くの人々が犠牲になりました。残念乍ら、2025年は国際秩序の危機の年として歴史に残るようと思われます。本年は11月に米中間選挙があります。新年が、少しでも平和で、国際協力が少しでも進む年になるよう願わずにはおれません。

当協会の活動は、国際航空運賃の大幅な値上がり等はあるも、通常の活動を行うことができます。これも、多くの方々のご支援、ご協力の賜物です。上智大の織朱實先生にご参加頂き、国際機関太平洋諸島センターの留学生が上智大学大学院を卒業

ターザーの企業訪問団との協力開催の下に、現地政府や企業関係者と環境対策や両国のビジネス協力等の推進につき有益な議論をすることができました。

太平洋島嶼国やカリブ諸国から

の留学生招聘は、当協会にとり大変重要な活動です。その内、ミクロネシアのザビエル高校卒業生の留学事業では、現在6名が上智大学で勉強しています。

この支援は基本的に皆様方のご寄付で可能となっているもので

す。厚くお礼を申し上げます。

我々の活動の半分は、カリブ諸国との交流事業です。秋には、カリブから3名のジャーナリストが訪日、太平洋島嶼国からの2名の参加者と合同で、関西に

パーやネットで発信されました。11月には、西インド諸島大学モナ校(ジャマイカ)のウィリアムズ学長一行の訪日をホストしました。

2026年1月  
一般財団法人国際協力推進協会(APIC)  
重家俊範 理事長



## APIC の主な動き [ 2025 年 5 月～ 12 月 ]

5月	第417回早朝国際情勢講演会 (講師: 前駐エジプト特命全権大使 岡浩氏)	9月	第420回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省国際法局長 中村和彦氏)
6月	ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援 第418回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省中南米局審議官 高橋美佐子氏)	10月	太平洋・カリブ記者招待計画 第421回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省アジア大洋州局長 金井正彰氏)
7月	太平洋・カリブ学生招待計画 第419回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務審議官(経済) 赤堀毅氏)	11月	西インド諸島大学・学長招待計画 第422回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省軍縮不拡散・科学部長 中村仁威氏)
12月	第423回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省アフリカ部長 今福孝男氏)		



今号の表紙写真



ミクロネシア連邦 チューク環礁

撮影者: フロイド・K・タケウチ

Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos



# 太平洋・カリブ 学生招待計画

Student Invitation Program

2025



Session in East Asian Studies」(以下、Summer Session)に参加し、週末にはAPIC主催の観光ツアーを通じて日本文化を体験しました。これにより、参加者は学びと共に、異なる文化背景を持つ学生たちとの交流を深め、日本の多様な社会を直接体感する機会を得ました。

## プログラム概要

この招待計画は、夏季に実施されるのは今年で3回目となり、冬季プログラムと合わせて通算8回目の開催となります。今回の参加学生は、太平洋地域から5名(フィジー、トンガ、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島)、カリブ地域から5名(ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、バルバドス、アントイグア・バーブーダ)です。

学生たちは、7月1日から22日ま

## 週末の日本文化体験

週末には、APIC主催の観光ツアーガ行されました。7月5日には都内観光を実施し、都内を一望できるオーブントップバスツアー、江戸切子体験、浅草を訪問し通じ、東京の「伝統とモダン」が共存する魅力を体感しました。江戸切子体験では、それぞれ



が工夫を凝らしオリジナルのグラスを完成させました。

7月12日には、株式会社エヌアイディの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れました。現地では、千葉県立佐原高等学校の生徒たちと交流し、香取神宮を参拝、学業成就のご祈祷を受けました。その後、「佐原の大祭夏祭り」を見学し、山車会館で歴史を学ぶなど、



駐日ジャマイカ大使館を表敬訪問

地域文化への理解を深めました。屋台での買い物や「小江戸」と呼ばれる町並みの散策を楽しむ姿も見られ、交流の最後にはSNSを交換して今後のつながりを約束する学生もいました。

また本訪問には、2017年の本招待計画を契機に再来日し、現在は筑波大学大学院で学ぶボビー・スクーカさんも参加。自身の経験を踏まえ、日本の大学院進学やJETプログラム参加を検討している学生たちへアドバイスを送りました。

7月19日には、横浜を訪れました。

三菱みなとみらい技術館、横浜中華街、カップヌードルミュージアム、コスマワールドといった多様なスポットを巡る一日でした。特に三菱みなとみらい技術館とカップヌードルミュージアムでは日本の技術力・発明という部分に大変興味を持ち、真剣に見学している姿が印象的でした。

## 駐日ジャマイカ大使館へ表敬訪問

### 修了式・フェアウェルパーティー

APICの活動について理解を深めていただくという観点から、カリブ5か国からの学生は揃って駐日ジャマイカ大使館を表敬訪問しました。滞在中の学びや日本の規律正しさや侘び寂び

プログラム最終日には、上智大学にて修了式とフェアウェル・パーティーが開催されました。修了式では、APIC重家理事長および杉村美紀上智大学学長が挨拶があり、続いて学生たちによるSummer Sessionでの受講授



杉村上智大学学長による挨拶



トンガの学生とマンギシ大使による伝統舞踊の披露

といった概念といった日本への印象を共有していました。リチャーズ駐日ジャマイカ大使からは、学生たちには将来、日本とのかけ橋として活動してほしいと激励があり、学生にとって大きな励みとなりました。

このプログラムを通じて、参加学生は日本の文化や社会に触れ、国際的な視野を広げることができました。今後、各國の若者が日本との友好関係をさらに深め、相互理解の輪を広げていくことを期待しています。

業、日本で訪れた場所、自国との比較などの滞在中に受けた知的刺激についてのプレゼンテーションを行いました。その後、重家理事長から学生一人ひとりに修了証書が手渡されました。

フェアウェル・パーティーでは、重家理事長による開会の後、来賓としてティベタ・スカ・マンギシ駐日トンガ王國大使乾杯より乾杯のご発声をいただきました。トンガの学生による伝統舞踊の披露も行われ、マンギシ大使も飛び入り参加し会場は温かな一体感に包まれました。最後は全学生名残惜しそうに、最後の交流を楽しんでいました。

このプログラムを通じて、参加学生は日本の文化や社会に触れ、国際的な視野を広げることができます。今後、各國の若者が日本との友好関係をさらによく深め、相互理解の輪を広げていくことを期待しています。

このプログラムを通じて、参加学生は日本の文化や社会に触れ、国際的な視野を広げることができます。今後、各國の若者が日本との友好関係をさらによく深め、相互理解の輪を広げていくことを期待しています。

2025年6月29日から7月24日まで

の約3週間、太平洋・カリブ地域から計10名の大学生を招待しました。このプログラムは、日本についての理解を深めるとともに、国際的な交流を促進することを目的としています。招待された学生たちは、日本滞在中、上智大学の短期プログラム「Summer

Session in East Asian Studies」(以下、Summer Session)に参加し、週末にはAPIC主催の観光ツアーを通じて日本文化を体験しました。これにより、参加者は学びと共に、異なる文化背景を持つ学生たちとの交流を深め、日本の多様な社会を直接体感する機会を得ました。

での約3週間にわたるSummer Sessionを通じて、日本の文化、教育、歴史、社会、ポップカルチャー、芸術、日本語、東アジアの社会など、

アの社会など、多岐にわたるテーマについて学びました。世界各国から参加する大学生と共に、多文化環境での学習・交流を深める貴重な機会となりました。



## 参加した学生の声

プログラムに参加した10名の学生のうち、4名の感想文を掲載しています。  
(APICによる仮訳)

ジャマイカを離れ、APICの「学生招待計画」で東京に向かったとき、何か新しいことに向かっているのだとは思っていましたが、これほど自分自身が変わる経験になるとは予想していませんでした。約3週間半の滞在中、上智大学で学び、世界中から来た人々と出会い、日本文化の奥深さを体感しながら、まったく異なる世界にどっぷり浸かっている自分に気付きました。

東京は、これまで訪れたどの都市とも違って私を迎えてくれました。東京は、活気にあふれつつも整然とした不思議な街で、朝日は午前4時半に昇り、また、使いこなせるようになるには少し時間がかかりましたが非常に効率的な鉄道システムがあります。文化の違いはすぐに実感しました。日本人のコミュニケーションは間接的で落ち着きがあり、感情をあまり表に出さないため、私が普段慣れているやり方とはまったく異なっていました。誰も感情を露わにせず、そのため、特に慣れない場面で自分をどのように表現するかについて、より深く考えさせられました。

上智大学では、東アジアにおけるビジネスとテクノロジーを学びました。日本やシンガポールのような国々が、国家の発展の手段として教育をどのように活用しているかを知ることができ、大変興味深かったです。特に日本の「カイゼン(改善)」や「面子を重んじる考え方」という概念にとても興味を惹かれました。どちらも、イノベーションと対人関係における敬意が密接に結びついていることをよく示している考え方です。「比較で見る日本経済」の授業では、分析力だけでなく、過去の経済的失敗や、将来の政策を立てる際に避けるべき点についても学ぶことができました。「ジャパンifikーション(Japanification)」という考え方には特に印象に残っており、特に高齢化や少子化といった日本と同様の課題に直面しているジャマイカの将来戦略を考える際に非常に参考になるものでした。

中でも、最も印象的だった授業は、田中先生の「日本語と文化」でした。ジェスチャーや礼儀、断り方、文化的な習慣を学び、すぐに教室外でも実践することで、日本人に対する新たな敬意が生まれました。そのおかげで、東京での行動もより意識的に、謙虚な気持ちで過ごすことができました。

教室の外では、世界各国からの友達もできました。アメリカ、フィンランド、アルゼンチン、南アフリカ、ポルトガル、そして日本の友達です。彼らのおかげで、今回の旅は忘れられないものになりました。ほぼ毎晩、新しい料理に挑戦し、特に路地裏のラーメン店で地元の人たちと肩を並べて食べるのが楽しかったです。どの料理も美味しい安く、日本でのお土産や買い物もとても手頃でした。

他にも心に残っている経験として、SHIBUYA SKY(渋谷スカイ)の屋上から街を見下ろし、そこにいるだけで幸運だと感じたことや、ふるさと東京応援祭で地元の人々と踊り、エネルギーと喜びに満ちた雰囲気に圧倒されたことがあります。予想外に、日本には楽しさリズムにあふれた一面があるのだと感じました。

明治神宮を訪れた際に、おみくじで「諦めずに進め。試練の時期があっても、やり遂げることができる」という言葉を引き心に響いたことも、絶対に忘れません。神社の雰囲気はとても穏やかでした。APICが企画してくれた週末のフィールドトリップも素晴らしい、特にカップヌードルミュージアムや江戸切子体験が印象的でした。また、浅草で出会った地元の方が、私の予想以上にジャマイカについて詳しくも覚えています。家から遠く離れた場所にいながら、こんなにも自分を理解してくれる人がいると感じられ、不思議な体験でした。

この旅はただ勉強するためだけではなく、自分自身を成長させる機会でもありました。人や感情、文化、ビジネスの見方まで変えてくれて、必要だとは知らなかったツールを手に入れることができました。学びは必ずしも教室で起こるものではなく、時には会話の中、電車の中、あるいは東京の路地裏でラーメンを食べているときにも起こることを実感しました。

この忘れられない経験を通じて、APICの皆さまの親切さ、丁寧なサポート、そして惜しみないご厚意に、心より感謝申し上げます。また、この機会を与えてくれたUWIにも深く感謝しています。この経験は、さまざまな形で私に変化をもたらし、そこで得た学びをこれから的人生において忘れずに生かしていきたいと思います。

日本での時間は、本当に非日常的で特別な体験でした。APICを通じて上智大学で学ぶ機会は、これまでで最も貴重な経験の一つです。教室で日本社会について学ぶだけでなく、実際にその社会を体験できたことは、とても有意義でした。特に、APICが主催してくれた週末のアクティビティでは、日本の生活のさまざまな側面を直接体験することができ、大変楽しかったです。また、講義も非常に充実しており、特に「現代日本社会」を担当されたサラディン教授の授業には深く感銘を受けました。日本の文化や食べ物、独自の社会構造はいずれも強く印象に残っています。

さらに、この体験を太平洋・カリブ地域の仲間たちと共有できたことが、より意義深いものにしてくれました。多様なバックグラウンドを持つ学生たちとの交流は、学びや意見交換、友情の豊かな場となりました。仲間たちの視点から多くの学ぶことができ、一緒に作った思い出は一生大切にしたいと思います。日本での経験は、日本という国について学ぶだけでなく、出会った人々や築いたつながりを通して、自分自身を成長させる機会にもなりました。

### ジャマイカ

クリストファー・ビーソンさん  
Mr. Christopher Beason  
西インド諸島大学 グローバル校  
University of the West Indies  
(Global Campus)



これまで最も有意義な投資は、APICとともに歩んだ私の旅です。APICのおかげで、太平洋から東アジアへと移動し、人生の出来事をこれまでとは異なる視点から見つめ、考え方を変えることができました。私の南太平洋大学での講師の一人は、社会学的な視点の典型例を説明する際に、よく日本を取り上げます。ポップカルチャーやアイデンティティの再現、そして他にも色々なことについて詳しく知ることができます。まるで自分が映画の中にいるように、教室で学んできたことを実際に体験するために、いつか日本に行きたいとずっと夢見ていました。日本への憧れと好奇心に胸を膨らませていたのです。日本に到着すると、そこにはまさに想像していた通りの光景が広がっていました。高層ビル、美しい光に彩られた橋、きらめく色とりどりのライトや信号機、そして見覚えのある東京スカイツリーや東京タワー。映画や雑誌でしか見たことがなかった景色が、30分も経たないうちに目の前で現実となっていました。

私はただ好奇心に駆り立てられ、心を開いて講義を受けました。伝統舞踊や現代文化、伝統的な料理や飲み物、箸の使い方など多くを学びましたが、なかでも日本の教育制度について学んだことが、今回の旅の最大の収穫でした。週末のフィールドトリップでは、教室での理論と社会インフラや現実がどのように結びついているかを目の当たりにしました。日本では、男女ともに教養があり、協調性を持ち、健康であることが求められています。博物館の多くも、その理想を子どもたちに伝える目的で作られています。例えば、横浜の「カップヌードルミュージアム」は、子どもたちが幼いころから健康的な食事の作り方や食べ方を学べるように作られています。日本は「模範を示すこと」で人々を導いており、それこそが「生きがい」の一種なのだと感じました。多少の失敗があっても、常に「伸び伸び」というように良い面に目を向ける姿勢があるのです。

APICのプログラムは国際協力や外交関係の強化を目的としていますが、私にとっては、太平洋地域などで起きている地域課題への向き合い方そのものを教えてくれる経験でもありました。学術的な知識だけでなく、社会的にも豊かな知識と知恵を得ることができました。日本滞在中、瞬く間に起るさまざまな出来事に対して、より愛情深く、思いやりを持ち、好奇心を抱くようになりました。佐原高校の生徒たちと交流したとき、彼らは限られた英語で一生懸命コミュニケーションを取ってくれました。APICのプログラムは、自己を振り返り、人ととの関わりを新たに築き直すきっかけを与えてくれるものだと実感しました。日本には最先端の技術や革新的な発明がありますが、伝統を手放すことはありません。むしろ、その伝統的な知識が多く社会問題の解決につながっているのです。日本は、現代と伝統をうまく融合させ、社会・経済・環境の課題に挑戦しています。特に東京という大都市においても、文化や伝統が今なお息づいている点に強く感銘を受けました。

私は「モアナ(太平洋)」の仲間たちに、ぜひ日本を訪れ、上智大学で学び、日本の文化と社会を体験することを強く勧めたいと思います。

### アンティグア・バーブーダ

アジャンテ・フレイザーさん  
Mr. Ajanté Fraser  
西インド諸島大学 ファイブアイランズ校  
University of the West Indies  
(Five Islands Campus)



夢はしばしば、心の中のささやきのように静かに始まり、やがて現実になるものです。私にとって、その瞬間は、二人の子どもを抱きしめて別れを告げ、日本行きの飛行機に乗ったときに訪れました。子どもと離れるのも初めて、一人で旅するのも初めて、そしてパラオの海岸からこれほど遠くまで行くのも初めてでした。不安と希望が入り混じる中で、この機会は私だけのものではなく、子どもたちのためでもありました。成長し、学び、未来を形作る物語や教訓を持ち帰るチャンスでもあったのです。家族の励ましと神の恵みに支えられ、勇気を振り絞って、私の人生を変える旅が始まりました。

成田空港に降り立ったとき、午後の太陽がまだ東京の街を明るく照らしていました。すべてに圧倒されるほどでありながら、希望に満ちていると感じました。電車は完璧なリズムで動き、街は果てしなく広がり、目に見えるすべての標識が、ここが故郷から遠く離れた場所であることを思い出させました。それでもほどなくして安心感を得られたのは、場所ではなく、出会った人々のおかげでした。

平日は上智大学で過ごし、私の考え方を搖さぶり、視野を広げてくれる講義に没頭しました。世界各国から集まったクラスメイトに囲まれ、教授陣からだけでなく、仲間の語る体験や視点から多くを学びました。毎日がより大きな世界への一步のように感じられ、深く学び、故郷に有意義なものを持ち帰る責任を心に抱いていました。

週末はまるで歴史や文化の生きる一冊の本の中に足を踏み入れるような冒険の連続でした。ある土曜日には、2階建てオープントップバスで東京を巡り、写真でしか見たことのなかった皇居、国会議事堂、東京タワー、そして時を超えて立つ浅草寺などの観光名所を眺めました。

横浜では中華街やカップヌードルミュージアム、コスモワールドを訪れました。自分だけのカップヌードルをデザインし、小さな「故郷の象徴」を持って歩いて楽しかったです。佐原では高校生たちと昼食や夕食を共にし、お互いの生活について語り合いました。江戸時代の雰囲気が残る運河と一緒に歩き、佐原の大祭に参加する中で、伝統の静けさと祭りの喜びを同時に感じました。その日は笑い声と屋台の味、そして心からの交流に満ちていて、文化交流の本当の目的である「理解と友情の架け橋を築くこと」を思い出させてくれました。

しかし、この旅を本当に形作ったのは、訪れた場所だけではなく、そこで出会った人々でした。共に電車の乗り換えに挑戦し、食事を分け合い、永遠に大切にしたい思い出を作りました。夜遅くまで語り合ったり、迷子になって一緒に道を探したり、コンビニでおにぎりを食べたり——そんな何気ない瞬間に、異国の地でも居場所を見つけたのです。彼らはもはや「将来の友人」だけではなく、日本で出会った家族のような存在になりました。

私を信じ、この素晴らしい機会を与えてくださったAPIC、日本大使館、そしてパラオ・コミュニティ・カレッジに心から感謝しています。彼らの支えがあったからこそ、この旅は実現しましたし、信頼や励まし、コミュニティの力の大切さを改めて感じました。子どもたちのもとへ帰る今、感謝の気持ちを胸に抱きながら、かつて心の奥でささやいた夢が、今や生き生きとした思い出として私の人生に刻まれていることを実感しています。

### トンガ

マティーナ・カイタプさん  
Ms. Matina Kaitapu



南太平洋大学  
University of the South Pacific

### パラオ

ブリチエット・イデルケイさん  
Ms. Britchet Idelkei



パラオ短期大学  
Palau Community College

太平洋・カリブ事業

# 太平洋・カリブ 記者招待計画

APIC Japan Journalism Fellowship

2025



今回、一行は、都内のはか、大阪、高松に於いて実施しました。

一行は、都内のはか、大阪、高松に於いて実施しました。

高松に於いて実施しました。

一行は、都内のはか、大阪、高松に於いて実施しました。

一行は、都内のはか、大阪、高松に於いて実施しました。

一行は、都内のはか、大阪、高松に於いて実施しました。

2025年9月26日から10月7日まで、APICは、公益財團法人フォーリン・プレスセンター（FPCJ）の協力のもと、環境・防災・観光をテーマとして、太平洋島嶼国から2名、カリブ諸国から3名の報道関係者の参加を得て、「太平洋・カリブ記者招待計画」を東京、大阪（万博を含む）、神戸、高松に於いて実施しました。

参加者は、フィジー出身でニュージーランド・メディアの記者（豪州在住）クリスティン・ロヴォイ氏、トンガからティサ・コカナシガ氏、ベリーズからコートニー・メンジー氏、ジャマイカからラッケル・ロビンソン氏、トリニダード・トバゴからカマリー・ロビンソン氏、加えて、プログラム・コーディネーターとして米国からドーン・マタス氏が参加しました。ベリーズとジャマイカの2名はいずれもTVの記者です。この記者招待計画において、各記者はプログラム・コーディネーターの指導の下、毎日、訪問先での取材を終えた後に確認・打合せを行い、記事を1本以上執筆することが課されています。なお、各訪問先にはAPICの荒木事務局長・理事が同行しました。

都内視察とブリーフィング

記者たちは9月26日（金）に訪日し、FPCJを訪問して事務手続きを行った。翌27日（土）と28日（日）はそれぞれ都内見学などを行いつつ時差調整・体調管理を行いました。実質的な初日となる29日（月）は、APICにおいてプログラムの全般的な説明を行い、重家理事長から日本の政治（折り合い）、自民党総裁選の直前、経済情勢、高齢化社会など日本社会の現状、対外的な課題について説明しました。午後、

官から両地域と日本との関係等について説明を受けました。その後、気象庁を訪問し、気象防災オペレーションルームで気象予報、台風のモニタリング業務の説明を受け、最後にFPCJを訪問



## 2024年度「太平洋・カリブ学生招待計画」参加者が大阪・関西万博のスタッフとして再来日

2024年度「太平洋・カリブ学生招待計画」に参加したアシュリー・キンチさん（バルバドス出身）が、2025年大阪・関西万博のスタッフとして再来日しました。アシュリーさんから届いたメッセージをご紹介します。（APICによる仮訳）

私はアシュリー・キンチと申します。バルバドス出身で、昨年の夏、APICの支援により上智大学のサマーセッションに参加するため日本を訪れました。

そして今年、2025年大阪・関西万博で母国バルバドスを代表する機会をいただき、再び日本を訪れました。昨年も大阪を少しだけ訪れましたが、今回は2か月間滞在しました。非常に暑い夏ではありましたが、万博での仕事や休日の時間を通じて素晴らしい経験ができました。

万博で働くことは本当に特別な経験でした。日本の方々だけでなく、様々な国から、毎日多くの来場者がありました。バルバドスは日本からとても遠いため、多くの方々が私の国について質問してくれました。そのたびにバルバドスの魅力を紹介できることがとても嬉しく、皆さんの反応を見るのも楽しかったです。

自国の情報を伝える一方で、日本人の同僚や毎日サポートしてくれたスタッフを通じて、日本についてたくさん学ぶことができました。これは昨年、上智大学で学んだ内容への理解をさらに深める良い機会となりました。

万博以外の時間には、エキスポシティや大阪城、京都の伏見稻荷などにも足を運びました。日本の建築や自然の美しさには、今回も改めて感動しました。また、大阪歴史博物館では、大阪城や大阪の暮らし、日本の歴史について多くを学びました。

日本で2度の夏を過ごしたことをきっかけに、現在通っている西インド諸島大学（UWI）ケーブヒル校で、初級の日本語コースを今学期から履修し始めました。これまでの2回の滞在で出会った日本の友人たちと日本語で会話ができるようになりたいと思っていますし、日本文化に深く浸りたいと感じています。日本語の知識がまだ十分でないので、少し大変なところもあります。

私は心から日本を好きになりました。いつか必ず戻ってきたいと思っています。



日本滞在中の写真。1. 2025年大阪・関西万博にて 2. 太陽の塔とともに 3. 大阪城にて 4. 京都・伏見稻荷大社

## 大阪市のごみ焼却の視察

に記者会見室を見学しました。

9月30日（火）は、午前中に新幹線で大阪に移動し、午後、大阪広域環境施設組合舞洲工場（ごみ焼却場）を視察しました。工場の外観は、まるでバルセロナのガウディの作品かと思われるようなもので驚かせますが、実は、ウイーンの芸術家フリー・デンスラ・イビ・ファンデルト・ヴァッサー氏によりデザインされたものだということで、建物が地域に根ざして、技術・エコロジー・芸術の融和のシンボルとなるよう意図されています。大阪市、八尾市、松原市及び守口市が7つのごみ焼却場を保有していて、この舞洲工場はその一つですが、外観にもお金をかけており、総工費は609億円だそうです。施設内の説明を受けながら、参加記者の国には焼却炉がないので、非常に関心をもつて質問をしていました。



9月30日（火）は、午前中に新幹線で大阪に移動し、午後、大阪広域環境施設組合舞洲工場（ごみ焼却場）を視察しました。工場の外観は、まるでバルセロナのガウディの作品かと思われるようなもので驚かせますが、実は、ウイーンの芸術家フリー・デンスラ・イビ・ファンデルト・ヴァッサー氏によりデザインされたものだということで、建物が地域に根ざして、技術・エコロジー・芸術の融和のシンボルとなるよう意図されています。大阪市、八尾市、松原市及び守口市が7つのごみ焼却場を保有していて、この舞洲工場はその一つですが、外観にもお金をかけており、総工費は609億円だそうです。施設内の説明を受けながら、参加記者の国には焼却炉がないので、非常に関心をもつて質問をしていました。

10月1日（水）は、当時開催中のEXPO2025にて参加記者出身国のパビリオンを順次訪問し、自国がどのように対外的に広報しているか、万博審議役兼部長から万博の概要の説明を受けました。その後、万博の大屋根りングの外にある「カーボンリサイクルファクトリー見学ツアー」でRITE（公益財団法人地球環境産業技術研究機構）、大阪ガス、エア・ウォーターカーの3種類のツアーパーに参加し、空気中からCO<sub>2</sub>を回収したり、メタンと混じてエネルギーとして万博会場や近隣の700世帯に供給している施設、また、きれいな水として海洋に放出している施設を視察しました。その後、会場内のブルーオーシャン・ドームで、いかに海洋ごみが増えているかとということを学びました。

午後は、記者の出身国が入っているコモンズ館を順に回りました。各国のブースでは、責任者から説明を受け、また、記者もそれぞれインタビューを行い、自国向けの記事を書いて、非常に盛り上りました。その後、大屋根に上り、半周して会場の全体像を見ました。

夕方には、会場内の海上部分で、水上を自由に動く床（台船のようなもの）のロボット実証実験を視察しました。自動で海洋ごみを回収したり、例えば、川の渡しを船頭がいなくても自動で運航できるという実験で、皆興味をもつた。

また、記者もそれぞれインタビューを行った。その年は阪神・淡路大震災が1月に起こり、3月には地下鉄サリン事件が起こって、多くの記者が神戸からいなくななり、サリン事件に関心が移ってしまったこと、神戸新聞は、地元の新聞としてその後も関連死や被災者の精神的なダメージなども含めて被災者に寄り添った報道を続け、海外の自然災害にも他社よりも多くの紙面を割いているという説明がありました。参加記者の多くは、30年前には生まっていたが、まだ幼少で、大震災の記憶がないため、完全に復興した神戸の街並みを見て、日本でもこのような大災害があつたということに驚いていました。

午後は、「原宿はらっぱファーム」というNGOが渋谷区神宮前の空き地（テニスコート7面分の国有地）で生ごみからコンポストを作っている現場を訪問しました。代表の安西美喜子さんによると、2025年4月から1年間の契約で空き地だった国有地を借りて、土を運び、畑を作り、コンポストによる資源循環の活動、学びのワーキング・ショップを通じて、



各国のブース  
1.トンガ  
2.トリニダード・トバゴ  
3.ジャマイカ  
4.フィジー  
5.ベリーズ

## ホタテ貝からヘルメット、阪神・淡路大震災の記憶

また、記者もそれぞれインタビューを行った。その後、大屋根に上り、半周して会場の全体像を見ました。

夕方には、会場内の海上部分で、水上を自由に動く床（台船のようなもの）のロボット実証実験を視察しました。自動で海洋ごみを回収したり、例えば、川の渡しを船頭がいなくても自動で運航できるという実験で、皆興味をもつた。

局西部記者に会い、日本の政治状況など、記者同士ということでフランクな議論をしました。中島次長から、読売新聞が日本で一番大きい新聞社であるが、最近はネットでニュースを見る人も多くなって購読者が減少していることや、同社のスタンスなどが説明されました。参加記者から、アメリカではFOX Newsはトランプ支持を明確にしているが、日本の新聞はどうかという質問があり、中島次長から、日本の新聞は政権に偏るということはないという説明がありました。

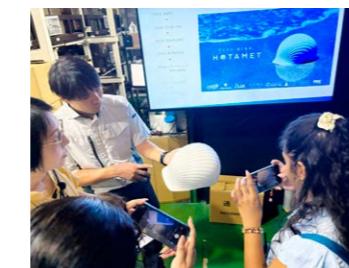
午後は、「原宿はらっぱファーム」というNGOが渋谷区神宮前の空き地（テニスコート7面分の国有地）で生ごみからコンポストを作っている現場を訪問しました。代表の安西美喜子さんによると、2025年4月から1年間の契約で空き地

れています。現在は、産業廃棄物として買い取り、粉碎して、大阪に運搬して、プラスチックと混ぜて、ヘルメット（製品名HOTAMET）を製造しており、万博会場でも使用されています。海外へは、「SHELLMET」という名前で販売しています。産業廃棄物が再利用されて、製品となることに皆感銘を受けていました。

午後は、神戸に移動して、まず、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」において、震災がどれほど大きかったか映像を見た後、防災の観点から、ボランティアガイドより、建物の強度についての実験などをしながら、説明がありました。その後、神戸新聞社で、石崎勝伸研修局文化部長より、震災当時は25歳の駆け出しの記者であったが、神戸新聞の本社が崩壊した中で、神戸・芦屋地区の担当となり、御自身の体験を交えた説明を

受けました。その年は阪神・淡路大震災が1月に起り、3月には地下鉄サリン事件が起こって、多くの記者が神戸からいなくななり、サリン事件に関心が移ってしまったこと、神戸新聞は、地元の新聞としてその後も関連死や被災者の精神的なダメージなども含めて被災者に寄り添った報道を続け、海外の自然災害にも他社よりも多くの紙面を割いているという説明がありました。参加記者の多くは、30年前には生まっていたが、まだ幼少で、大震災の記憶がないため、完全に復興した神戸の街並みを見て、日本でもこのような大災害があつたということに驚いていました。

午後は、「原宿はらっぱファーム」というNGOが渋谷区神宮前の空き地（テニスコート7面分の国有地）で生ごみからコンポストを作っている現場を訪問しました。代表の安西美喜子さんによると、2025年4月から1年間の契約で空き地



神戸新聞社にて

## 再び都内での取材およびプログラム修了式

一行は、6日（月）午前、読売新聞東京本社（前アメリカ総局長）と横堀裕也編集長

東京本社で、中島健太郎国際部次長（前アメリカ総局長）と横堀裕也編集長

一行は、6日（月）午前、読売新聞東京本社（前アメリカ総局長）と横堀裕也編集長

午後は、神戸に移動して、まず、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」において、震災がどれほど大きかったか映像を見た後、防災の観点から、ボランティアガイドより、建物の強度についての実験などをしながら、説明がありました。その後、神戸新聞社で、石崎勝伸研修局文化部長より、震災当時は25歳の駆け出しの記者であったが、神戸新聞の本社が崩壊した中で、神戸・芦屋地区の担当となり、御自身の体験を交えた説明を

受けました。その後、神戸新聞社で、石崎勝伸研修局文化部長より、震災当時は25歳の駆け出しの記者であったが、神戸新聞の本社が崩壊した中で、神戸・芦屋地区の担当となり、御自身の体験を交えた説明を

受けました。

午後は、「原宿はらっぱファーム」というNGOが渋谷区神宮前の空き地（テニスコート7面分の国有地）で生ごみからコンポストを作っている現場を訪問しました。代表の安西美喜子さんによると、2025年4月から1年間の契約で空き地

だつた国有地を借りて、土を運び、畑を作り、コンポストによる資源循環の活動、学びのワーキング・ショップを通じて、

重家理事長主催の夕食会を開催しました。

午後は、「原宿はらっぱファーム」というNGOが渋谷区神宮前の空き地（テニスコート7面分の国有地）で生ごみからコンポストを作っている現場を訪問しました。代表の安西美喜子さんによると、2025年4月から1年間

# バヌアツにてPI-Cとの初の合同環境セミナーを開催

APICは2025年9月11日（木）から16日（火）にかけて、バヌアツ共和国を訪問し、現地関係機関との協議や環境関連施設の視察を実施するとともに、9月16日に「第6回APIC太平洋環境セミナー」を開催しました。当初は2025年2月に開催予定でしたが、2024年12月17日に発生した地震の影響により延期され、今回の実施となりました。今回のセミナーは、PI-C主催で行われた「経済セミナー」に続けて開催されたことで、経済と環境を連続して議論する新たな枠組みを築く試みとなりました。

## 現場視察を通じた課題把握

セミナー開催に先立つ9月12日（金）、訪問団（織田實 上智大学大学院地球環境学研究科教授、田中一成常務理事、浅野未莉職員）は終日、関係機関訪問

年に入つてからはホテルは年内満室というほど観光需要が戻ってきているとのことでした。自然を大切にする国民性や精靈信仰が根付いていることも、観光資源としての強みであり、今後の経済回復の鍵になると強調されました。さらに、青年海外協力隊の活動状況や、ブルーエコノミーを基盤とする新たな技術協力プロジェクトの紹介がありました。特に「豊かな前浜プロジェクト」はマンガリリュー村を拠点に展開されており、2025年4月からは資源保護から「活用と保全の両立」へシフトすることが期待されています。震災を経て、バヌアツが持つ観光・水産・

ないまま放置され、ため、十分な埋め立て管理が行えず、自然発火が繰り返し発生しているとの報告がありました。こうした状況はダイオキシンの発生など環境・健康リスクにつながる恐れがあり、廃棄物管理における「持続可能な仕組みづくり」が喫緊の課題であることを強く印象づけました。



1. JICA バヌアツ支所  
2. バヌアツ気候変動省環境保全局  
3. マンガリリュー村の養殖場にて

境と経済の連携を象徴する事例といえます。

その夜に田中常務理事主催夕食会が開催され、奥田直久駐バヌアツ大使、オズボーン・マレナム・バヌアツ気候変動省環境保全局長も参加しました。翌週の環境セミナーに向け、日本側とバヌアツ側の顔合わせと意見交換の機会となりました。

## 文化と自然を体感する視察

9月13日（土）、訪問団は奥田大使のご案内により、バヌアツの文化と自然を体験する一日を過ごしました。

朝食後に訪れたバヌアツ国立博物館では、UNESCO無形文化遺産に登録されている「砂絵」のデモンストレーションを鑑賞しました。物語を語りながら一筆書きで描かれる砂絵は、芸術と口承文化を融合させた独自の表現で

自然資源の価値をいかにレジリエントな形で発展させるかが重要なテーマであることです。

続いて訪問したバヌアツ気候変動省環境保全局では、オズボーン・マレナム局長より、廃棄物管理をめぐる喫緊の課題が提示されました。特に埋立地不足やプラスチック廃棄物の急増は深刻であり、地震災害によつて瓦礫処理の経験が十分でないことも問題を複雑化させています。こうした制約の中で限られた予算と人材をどう効率的に活用するか、また「経済性と生態系の両立」をどう実現するかが、政策上の最重要課題であると指摘されました。

午前中の最後には、首都近郊のブツファ最終処分場を視察しました。職員の数は限られ、重機の故障が修理され

と現場視察を行い、環境・経済両面にわたる課題と取り組みを把握しました。最初に訪れたJICAバヌアツ支所では内島光孝所長から2024年12月に発生した地震の影響について説明がありました。地震は観光やホテル産業に深刻な打撃を与えましたが、その後復興に向けた動きが加速し、2025年に入つてからはホテルは年内満室と



## 滞在中の主なスケジュール

9/11 (木)	- ポートビラ着 - 在バヌアツ日本大使館訪問
9/12 (金)	- JICA バヌアツ支所訪問 - バヌアツ気候変動省環境保全局訪問 - ブツファ最終処分場視察 - マンガリリュー村施設視察 - 田中常務理事主催夕食会
9/13 (土)	- 文化と自然の視察（バヌアツ国立博物館、Pepeyo Cultural Village、Blue Lagoon、カヴァ・バー）
9/14 (日)	- 奥田大使主催夕食会兼日本からの参加者結団式
9/15 (月)	- PIC 主催 経済セミナー
9/16 (火)	- 第6回 APIC 太平洋環境セミナー - ポートビラ発

## バヌアツ共和国 Republic of Vanuatu

南太平洋にある約80の島々からなる群島国。1980年に英国とフランスの共同統治下から独立し、イギリス連邦加盟国となった。

面積：12,190km<sup>2</sup>（新潟県とほぼ同じ大きさ）  
人口：327,777人（2024年、世界銀行）  
首都：ポートビラ  
民族：メラネシア系（93%）、その他中国系、ベトナム系及び英仏人が居住。  
言語：ビスマルク語（ビジン英語）、英語、仮語（いずれも公用語）  
宗教：主にキリスト教

（基礎データ出展：外務省HP）



4. 砂絵 5. Blue Lagoon 6. Pepeyo Cultural Village にて

大使公邸にて、奥田大使主催の立食形式による夕食会兼日本からの参加者結団式が行われました。PICの斎藤龍三所長、尾崎氏に加え、株式会社クニエ・南洋貿易・ゴミソリューションズ・成田空港ビルディング・J-Life・アーチエッジビーチ・P.I.C斎藤所長の乾杯の辞へ

行い、成田空港ビルディング・J-Life・扶桑グループ・東京製鋼株式会社・J-LIFE・アーチエッジビーチ・P.I.C斎藤所長の乾杯の辞へ

と続きました。和やかな雰囲気の中での挨拶に続き、各参加者が自己紹介を

し、文化的な一日を締めくくりました。

夕刻にはカヴァ・バーを訪れ、バヌアツ郷土料理「ラップラップ」を体験。さらにファイヤーダンスショーを鑑賞し、文化的な一日を締めくくりました。

午後はBlue Lagoonにてシュノーケリングを体験しました。透明度の高い海と豊かな生態系を実感することで、観光と環境保全を両立させる重要性を改めて認識する機会となりました。

夕刻にはカヴァ・バーを訪れ、バヌアツ郷土料理「ラップラップ」を体験。

アーチエッジビーチ・P.I.C斎藤所長の乾杯の辞へ

と続きました。和やかな雰囲気の中での挨拶に続き、各参加者が自己紹介を

し、文化的な一日を締めくくりました。

午後はBlue Lagoonにてシュノーケリングを体験しました。透明度の高い海と豊かな生態系を実感することで、観光と環境保全を両立させる重要性を改めて認識する機会となりました。

夕刻にはカヴァ・バーを訪れ、バヌアツ郷土料理「ラップラップ」を体験。

アーチエッジビーチ・P.I.C斎藤所長の乾杯の辞へ

と続きました。和やかな雰囲気の中での挨拶に続き、各参加者が自己紹介を

し、文化的な一日を締めくくりました。

午後はBlue Lagoonにてシュノーケリングを体験しました。透明度の高い海と豊かな生態系を実感することで、観光と環境保全を両立させる重要性を改めて認識する機会となりました。

夕刻にはカヴァ・バーを訪れ、バヌアツ郷土料理「ラップラップ」を体験。

アーチエッジビーチ・P.I.C斎藤所長の乾杯の辞へ

と続きました。和やかな雰囲気の中での挨拶に続き、各参加者が自己紹介を

し、文化的な一日を締めくくりました。

午後はBlue Lagoonにてシュノーケリングを体験しました。透明度の高い海と豊かな生態系を実感することで、観光と環境保全を両立させる重要性を改めて認識する機会となりました。

夕刻にはカヴァ・バーを離れ、バヌアツ郷土料理「ラップラップ」を体験。

アーチエッジビーチ・P.I.C斎藤所長の乾杯の辞へ

と続きました。和やかな雰囲気の中での挨拶に続き、各参加者が自己紹介を

し、文化的な一日を締めくくりました。

午後はBlue Lagoonにてシュノーケリングを体験しました。透明度の高い海と豊かな生態系を実感することで、観光と環境保全を両立させる重要性を改めて認識する機会となりました。

夕刻にはカヴァ・バーを離れ、バヌア

## PIC主催 経済セミナー

15日には、PIC主催の「経済セミナー」がThe Melanesian Port Vilaで開催されました。バヌアツ政府関係者、日本企業、国際機関が一堂に会し、経済と投資の可能性について活発な議論が展開されました。

午前の部では、外国投資促進庁（V FIPA）のレイモンド・ヴティ長官が登壇し、地政学リスクや2024年の地震による経済への影響を報告。外国投資の現状や政策優先分野（教育、保健、インフラ、ブルーエコノミーなど）について説明がありました。観光局のポール・ピオ氏からは、Air Vanuatu破綻による打撃を背景に、持続可能な観光への転換の必要性が示されました。

JICAの内島所長からは、これまでの支援実績や進行中のインフラ復旧プロジェクト、そして「豊かな前浜プロジェクト」を含む技術協力について紹介がありました。午後の部では、日本企業や現地

企業がそれぞれの取り組みを発表。廃棄物処理やエネルギー事業、通信、建設など幅広い分野での協力可能性が提示されました。特に現地側からは、観光と農業、エンジニアリングを結びつけた新たな成長戦略が示され、日本の技術と人材育成支援への期待が強く寄せられました。

セミナー終了後にはレセプションが行われ、出席者間の交流がさらに深まりました。ここでジョー・パコア・ルイ外務省国際協力・対外貿易局長兼EXPO 2025コミッショナーより、環境分野の人材育成のためにバヌアツから大学院留学生を日本へ送りたいとの相談があり、APICとしても今後の協力の可能性を確認しました。

## APIC太平洋環境セミナー

翌16日（火）には、第6回APIC太平洋環境セミナーが開催されました。本セミナーは、前日の経済セミナーに続けて実施されたことで、経済と環境の課題を連続して議論する新たな枠組みとなりました。司会進行はAPIC田中一成常務理事が行いました。開会にあたり、奥田大使とギブソン・デービッド事務次官（バヌアツ気候変

動省）が挨拶を行い、環境課題解決に向けた国際協力の重要性を強調しました。続いて織教授（上智大学）が日本の廃棄物処理・リサイクルシステムを紹介し、環境省・吉富萌子氏が日本（環境省）による支援の取り組みを説明。GOMIソリューションズ・関山一太氏はパラオやツバルでの実践事例を報告しました。

パネルディスカッションでは、ロンテクスター・モゲロール氏（気候変動省）、吉富氏、関山氏に加え、会場からはポートビラ市当局、JICA青年海外協力隊員、日本企業関係者も議論に参加。埋立地不足と分別の課題、水汚染の問題、リサイクル市場の未整備と輸送コスト、機材維持管理や人材育成の必要性といった現実的な問題が指摘されました。一方で、リサイクル米袋を利用したバッグ製作・販売事例やエコツーリズム活動を通じた啓発とり組み」も共有されました。奥田大使からは「合意形成とキーパーソンの発掘の重要性」が指摘され、PIC斎藤所長からは「ごみは資源」という観点から、ビジネス連携や日本の離島との協働の可能性が示されました。

会場には2023年にAPICの「太



7. 講演中の織教授 8. 会場の様子

## ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援2025



(写真提供：在ジャマイカ日本国大使館)

さらに、日本文化紹介の一環として、UWIジャパンクラブによる歌や在留

2025年5月31日、在ジャマイカ日本国大使館と西インド諸島大学（UWI）の共催により、日本語スピーチコンテスト2025が開催されました。本コンテストはJICA、ジャマイカ日本人会、JET同窓会、ジャマイカ日本語教師会の協力のもと、国際交流基金、イーストジャパンーズ、当協会の協賛により実施されました。

当日は約70名が参加し、渥美恭弘在ジャマイカ日本大使、UWIヴィヨリニア現代語・文学部学部長の挨拶の後、日本語学習者6名がスピーチを発表しました。スピーチのテーマは、「環境／観光／エネルギー」から選ばれました。スピーチは日本語のみで行われ、終了後には日本語による質疑応答も行われました。レベル2で優勝した学生は今回が3度目の出場となり、ついに優勝できたことへの喜びを語っていたそうです。

発表はレベル1（初級）およびレベル2（初級～中級）の2部門に分かれ、それぞれ3名ずつがスピーチを披露しました。スピーチのテーマは、「私が『私の好きなもの』」、レベル2が「環境／観光／エネルギー」から選ばれました。スピーチは日本語のみで行われ、終了後には日本語による質疑応答も行われました。レベル2で優勝した学生は今回が3度目の出場となり、ついに優勝できたことへの喜びを語っていたそうです。

### 西インド諸島大学 University of the West Indies (UWI)

西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。4つのキャンパス（ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケープヒル校、アンティグア・バーブーダのファイブアイランズ校）の他、通信制のグローバルキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

邦人によるダンスパフォーマンスのか、過去のコンテスト参加者やUWI卒業生による日本語学習経験や今後の目標に関するプレゼンテーションなども行われました。

また、今回のコンテストでは、日本語が分からぬ方にも配慮し、英語要約がスクリーンに投影されました。来場者からは、日本語学習経験にかかるさまざまなものなどをあつたよう

です。

APICは今回も、日本語の本や扇子、書道用品のほか、アニメ関連グッズや和風小物など、日本文化に親しみるさまざまな品を提供しました。参加者には大変喜ばれたとのことです。

平洋・カリブ記者招待計画」に参加されると同時に、APIC環境セミナーを同紙で取り上げ、APICの事業の成果が現地社会に還元される意義として初めて日本企業との接点が提示されました。経済と環境の両面から持続可能性を考える意義が共有されたことは本セミナーの大きな成果であり、また今後、バヌアツにおける環境、特に廃棄物処理の分野において、ODA等の日本政府による関わりだけでなく、民間企業の参画が期待されるものとなりました。



7. 講演中の織教授

# 西インド諸島大学・学長招待計画

カリブ諸国・リーダー招待計画

2025年11月9日から15日まで、  
APICはジャマイカにある西印度諸島大学モナ校(University of the West Indies (UWI) Mona Campus)のデンシル・ウイリアムズ学長を招待しました。同行したのは、医学部のマーヴィン・リード教授と工学部長のエイドリアン・ローレンス博士です。

訪問期間中、医学分野では慶應義塾大学および東京大学医学部、民間企業の株式会社アルムを、工学分野では筑波大学、産業技術総合研究所(産総研)、パナソニックを訪問しました。また、連携協定を締結している上智大学では、今後の教員レベルでの交流などについて意見交換が行われました。なお、各訪問先にはAPICの荒木事務局長・理事事が同行しました。

今回のモナ校学長の招待により、2017年から開始された西インド諸島大学学長招待計画(モナ校(ジャマイカ)、ケーブルヒル校(バルバドス)、セント・オーガスティン校(トリニダード・トバゴ))がようやく実現しました。

本部鉄道計画部長より事業概要の説明があり、その後、担当者からジャマイカを含むカリブ諸国での主な事業について紹介がありました。また、UWI側が首都キングストンでのLRT(ライトレールトランジット)開発に関心を持っていることを踏まえ、日本工営が世界各国で展開している鉄道事業に関するコンサルタント業務の概要についても説明がありました。さらに、日本工営がカリブ海で環境問題となっているサルガッサム(ホンダワラ属の褐色大

型藻類で、2011年以降カリブ地域等で爆発的な繁殖・漂着し、悪臭による環境汚染の他、観光業や漁業へも影響し、同地域の社会経済に打撃を与えていた)の利活用支援にも取り組んでいることが紹介され、UWI側からは今後の共同研究に向けて協力をお願いしたいとの発言がありました。

**慶應義塾大学医学部訪問**  
11日(火)午前、慶應義塾大学医学部を訪問しました。最初に、武林医学部長・衛生学公衆衛生学教授より、大學の歴史および医学部の概要について説明があり、その後、南宮感染症学教室教授(感染制御部部長・臨床感染症センター長)より、慶應義塾大学医学部の6年間のカリキュラム構成について説明がありました。特に、海外研修に力を入れている点が紹介され、選抜された学生は、提携先である米国、欧州、アジア太平洋地域の大学病院で、短期の臨床見学や実習に参加できることが説明されました。

続いて、最近まで米国のジョンズ・ホプキンズ大学に数か月留学していた学生2名から、留

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

医学部の6年間のカリキュラム構成について説明がありました。特に、海外研修に力を入れている点が紹介され、選抜された学生は、提携先である米国、欧州、アジア太平洋地域の大学病院で、短期の臨床見学や実習に参加できることが説明されました。

-筑波大学訪問  
-産業技術総合研究所訪問  
-東京観光  
-パナソニック ショウルーム東京訪問  
-杉村美紀 上智大学学長との会談  
-APIC 重家俊範理事長主催歓迎夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会

APICのオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

APICによるオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

-来日  
-APICによるオリエンテーション  
-上智大学、あん・まくどなるど教授訪問  
-株式会社アルム訪問  
-日本工営株式会社訪問

-慶應義塾大学医学部訪問  
-東京大学医学部訪問  
-リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会



## 第3期 APIC-UWI 留学生

皆さん、こんにちは。バルバドス出身のショネル・グリフィス、22歳です。現在、上智大学大学院地球環境学研究科で修士課程に在籍しています。趣味はバレーボール、水泳、そしてドミノ遊びをすることです。

上智大学の大学院に進学することを選んだのは、海外に渡って異なる文化を体験し、世界中から集まる人々と出会う貴重な機会になると思ったからです。ここ日本で得た知識を、バルバドスやカリブ地域全体の環境政策の発展・改善に可能な限り活かしたいと考えています。また、上智大学で新しい友人を作り、将来的に役立つようなネットワークを築けたらと思っています。

日本滞在中は、おいしい食べ物をたくさん味わい、都市だけでなく田舎や山など、さまざまな場所で日本文化を体験したいです。そして、ディズニーランドにはとても、とても行ってみたいです。

日本の文化はバルバドスのものとは大きく異なっており、今のところ一番衝撃を受けたのは、人々がとても静かなことです。ですが、私はそれをとても心地よく感じています。もう一つのカルチャーショックは、人々がとても急いで移動することです。母国ではみんなゆったりとしたスピードで行動しています。日本で直面する最大の課題は、家族と遠く離れて暮らすことだと思います。これほど遠く離れて生活するのは初めてです。また、日本語が話せないため、言葉の壁も大きな挑戦になるでしょう。しかし、これから学んでいきたいと思っています。



ショネル・グリフィス さん

Ms. Shonelle Griffith

バルバドス出身

APIC では太平洋・カリブ地域の留学生を支援するため、現在3つの奨学金制度を設けております。

## APIC-UWI 留学生

カリブ地域の国々の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することを目的として、APIC-MCT留学制度と同様に、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号の取得を支援するプログラムです。西インド諸島大学 (The University of the West Indies : UWI)・上智大学・APIC の三者間の協定が締結され、2023年度より開始しました。これまでに1名の学生が本制度によって卒業しました。

## APIC-MCT 留学生

上智大学・ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust : MCT)・APIC の三者間の合意に基づき、ミクロネシア3カ国からの留学生を受け入れ、上智大学大学院地球環境学研究科での修士号取得を支援するプログラムです。2017年のプログラムにより、これまでに7名が本奨学金制度によって上智大学を卒業しました。

## ザビエル留学生

2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APIC の三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学への留学生を支援するプログラムです。本奨学金制度により、これまでに7名が本奨学金制度によって上智大学を卒業しました。

## 「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

学生への支援をより一層充実させるため、本奨学金制度へのご寄付をお願いしております。いただいた寄付金は、留学生の受け入れにかかる渡航費、入学金、授業料、生活費等に活用させていただいております。

皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様の温かいご支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力をお願い申し上げます。

## ● ザビエル高校 (Xavier High School) とは

1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

対象 ザビエル高校卒業生(毎年1~2名入学)

留学先 上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース / Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)

奨学金 卒業までの4年間の奨学金を授与

振込先 三菱UFJ銀行 本店(店番001) 普通口座 1660339  
口座名:一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口  
カナ名:ザイ) コクサイ キヨウリヨク スイシン キヨウカイ  
※振込手数料はご負担をお願いしております。

## 第10期ザビエル留学生と第3期 APIC-UWI 留学生が上智大学／大学院に入学



2025年9月22日、第10期ザビエル留学生としてクレイトン・エゼキアスさんとリュー・ナカソネさんが上智大学に入学しました。また、第3期UWI留学生としてショネル・グリフィスさんが上智大学大学院に入学しました。

クレイトンさんとリューさんは理工学部に入学し、今後4年間、日本で学生生活を送ります。ショネルさんは地球環境学研究科で2年間の研究に取り組む予定です。

新入生3名からのメッセージをご紹介します。(APICによる仮訳)

## 第10期ザビエル留学生

クレイトン・エゼキアス さん  
Mr. Kreitton Ezekias

ミクロネシア連邦出身

こんにちは!私はクレイトン・サム・エゼキアスと申します。ミクロネシア連邦チューク州の出身です。現在、上智大学理工学部のグリーンサイエンスコースの1年生として学んでいます。

私は、日本の生活に深く身を投じ、探求することを目的に、名高く格式ある上智大学を選びました。また、上智大学で得られる学びは、今後の人生において必ず役立つと信じています。特に、「他者のために、他者とともに (For Others, With Others)」という大学の理念に共感しています。これは、持続可能な未来のために協力し合うことの大切さを強調するものです。

私はこれまで一度もチュークを離れたことがありませんでした。ですから、日本の上智大学に進学する機会を得たとき、ここに来るという選択に少しの迷いもありませんでした。日本に到着した瞬間、見渡す限り広がる街並みに圧倒され、胸が高鳴りました。しかし、最もカルチャーショックを受けたのは、どこへ行っても周りにたくさんの人がいることでした。私はもともと狭い場所があまり得意ではないので、最初に寮へ行くときに乗った電車は少し大変でしたが、次第に慣れて、今では気にならなくなりました。むしろ、毎日の通学時間が心を落ち着かせたり、元気を与えてくれたりする時間になっています。また、キャンパスの明るく活気ある雰囲気は、学業への意欲を高めてくれます。

滞在中は、日本各地を訪れてその自然の美しさを堪能し、豊かな文化や歴史についてもっと学びたいと思っています。少しでも日本語を覚えられたら嬉しいです。上智大学での学びを続けながら、日本の多様で活気ある環境の中で自分自身をさらに成長させていきたいと考えています。

リュー・ナカソネ さん  
Mr. Ryu Nakasone

ミクロネシア連邦出身

皆さん、こんにちは!私はリュー・ナカソネと申します。ミクロネシア連邦のポンペイ出身です。現在、上智大学理工学部のグリーンエンジニアリングコースで学んでいます。

上智大学で学びを深めたいと思った理由のひとつは、APIC の奨学金による全面的な経済支援があったからです。このような形で東京・日本で学ぶ機会をいただけたことに、心から感謝しています。また、学生としてだけでなく、一人の人間として成長するための最良の道だと感じ、上智大学で学びたいと思いました。家族とこんなにも離れて暮らすことは確かに大きな挑戦ですが、世界中から集まつて学生たちと出会い、文化を分かち合うことは、自分にとって学びと成長の貴重な機会となっています。

日本での生活は、これまでのところ本当に驚くことばかりです。電車の中では大きな声で話さないことや、大きく異なる食文化など、小さなカルチャーショックはありましたが、それ以上に良い面がたくさんあります。

なかでも一番驚いたのは、日本人の親切さとおもてなしの心です。テーブルに水筒を置き忘れてしまったときも、誰も持って行かなかったのには本当に驚きました。日本人の人々は本当に思いやりにあふれていて、これから的生活の中でもその優しさにもっと触れられたらと思います。

そして、グリーンエンジニアリングの学業でも成功を収めたいと考えています。試験やテストなど、避けられない大変さもあると思いますが、APIC と上智大学からいただいたこのご厚意に応えるためにも、与えられた機会を最大限に活かしていきたいです。

# バルバドス 歴史の散歩道

その7 第5部 砂糖、ラム酒、そして奴隸

寄稿：元駐バルバドス日本国大使 品田 光彦

APIC ウェブサイトでは、品田光彦 元駐バルバドス日本国大使寄稿の連続コラム「バルバドス 歴史の散歩道」を配信しております。本誌では「バルバドス 歴史の散歩道（その7）」の内容を掲載しています（2021年執筆）。  
その他のコラムについては、APIC ウェブサイトをご覧ください。

（本稿には現代の基準に照らすと差別的、不適切な表現が含まれていますが、いずれも過去の史料・文献の翻訳部分です。これらの箇所は筆者自身の見解ではなく、当時の社会状況を知るために正確に訳すことが必要と考えたからであることをご理解下さい。）

筆者がバルバドスに住むようになってから好きになつたもののひとつにラム酒があります。

でも、世界中のアルコール飲料が手に入れる日本で、残念なことになぜかラム酒はそれほどボビュラーではないようです。それ

どころか、日本でラム酒の話をすると「ああ、お菓子作りなんかに使う、あの甘いお酒ね」などという怪しからぬ反応が返ってくることが多い。あなたがストレートで飲んだラム酒がもし甘かったとしたら、それは「ま

がいもの」です。

バルバドスをはじめとするカリブ諸国で作られ世界中に輸出されている「本場もの」のラム酒は、砂糖キビから砂糖を精製する過程でできる糖蜜（モラセス）を発酵・蒸留・熟成して作られる、かなりアルコール度数



現存世界最古のラム酒蒸溜所で作られ続けているバルバドス産のラム酒

の高い飲み物です（註1）。ただし、砂糖キビから作られると言つても決して甘くはありません。上質のプランデーを思わせるような芳醇な味と香りで、ストレートでもよし、オングロックや水割りにしてもよし。モヒートやダイキリといったカクテルにも欠かせません。また、フルーツベースのよく冷えたラムパンチはカリブの暑さをしのぎながらホロ酔い気分になるには最適な飲み物かもしれません（ただし「当たりのよいラムパンチを調子に乗つて飲み過ぎると、必ず反省することになります）。

ラム酒が作られるようになったのは、カリブの一部の島々で砂糖キビの栽培がはじまりた16世紀後半ごろだと考えられています。「ラム酒作り発祥の地はバルバドスである」という人もいるのですが、ほかにもいろいろな説があるので確かなことは分かりません。ただはつきりしているのは、現在は世界各地で作られているラム酒の中でも、「マウント・ゲイ」というバルバドスの銘柄が18世紀初頭から操業を続ける現存世界最古のラム酒蒸溜所で作られ続けているといふことです。

バルバドスに5年半暮らした筆者は、その間ラム酒にたいそうお世話になりました。2022年4月、筆者がバルバドスでの任期を終えて日本に帰る数日前に、ミア・モトリーリ首相が「あなたがこれ好きなのが知つてゐるわよ」と言って、わざわざ筆者の家まで届けさせてくれたお土産も「マウント・ゲイ」のラム酒



上質なラム酒はオークなどで作られた樽で長期間熟成されます。  
—バルバドスの「セントニコラス・アビー・ラム酒工房」で撮影

## 人を所有するといつ発想

「ニグロや奴隸がキリスト教徒に狼藉をおこなつた場合、巡査によるムチ打ちの刑に処せられる。ふたたび罪を犯した場合にはムチ打ちに加え、鼻を削がれ焼きゴテで顔に焼印を押される。彼らは下劣な奴隸でいるラム酒ですが、このお酒には悲しい過

去があります。

——昔、砂糖キビプランテーションの主

だつたのでした。

こんなふうに今ではカリブでの余暇や社交に欠くことのできないアイテムになつてあります。「ラム酒作り発祥の地はバルバドスである」という人もいるのですが、ほかにもいろいろな説があるので確かなことは分かりません。ただはつきりしているのは、現在は世界各地で作られているラム酒の中でも、「マウント・ゲイ」というバルバドスの銘柄が18世紀初頭から操業を続ける現存世界最古のラム酒蒸溜所で作られ続けているといふことです。

バルバドスに5年半暮らした筆者は、その間ラム酒にたいそうお世話になりました。2022年4月、筆者がバルバドスでの任期を終えて日本に帰る数日前に、ミア・モトリーリ首相が「あなたがこれ好きなのが知つてゐるわよ」と言って、わざわざ筆者の家まで届けさせてくれたお土産も「マウント・ゲイ」のラム酒

の間ラム酒にたいそうお世話になりました。2022年4月、筆者がバルバドスでの任期を終えて日本に帰る数日前に、ミア・モトリーリ首相が「あなたがこれ好きなのが知つてゐるわよ」と言って、わざわざ筆者の家まで届けさせてくれたお土産も「マウント・ゲイ」のラム酒

ランドで行われているような12名の者による法的な裁判にかけられることはない。二ヶロ、奴隸がその所有者によって罰せられた際に不幸にして命、または身体の一部を失ったとしても、そのようなことは稀ではあるが——罰を与えた者は責任を問われない。——これは1661年に制定された「バルバドス奴隸法」の一節です。

この法律の前文には法目的が謳われており、「彼ら（奴隸）は異教、野蛮、不安定かつ危険な種類の人間である」ので、この法が「他の商品や動産と同じように彼らを保護することを目的とする」と書かれています。一方、奴隸の側が享受するほぼ唯一の恩恵としては、「年に一度、新しい衣服を得ることができる」と定められていました。

現代の私たちの常識からすると、とんでもない話なのですが、この法律（正式名称はなんと「ニグロをより良く統制し統治するための法律」）には、17世紀の格調高い英語でそう書かれていたのです。自分たちの都合でアフリカから大西洋を越えて黒人たちを無理やり連れてきておいて「異教、野蛮……」はないだろうと思うのですが、その頃のイギリス人をはじめとするヨーロッパ白人のアフリカ黒人に対する見方というものはこういうものでした。

「バルバドス奴隸法」は、世界各地のイギリス植民地のなかで白人支配層が黒人奴隸の待遇について成文化した初めての法律でした。そのため「グッド・ガバナンスのお

手本（？）となり、他のイギリス植民地もこれに倣うようになって、ジャマイカ、アンティグア、サウスカロライナなどでも似たような法律が作られていきました。

奴隸制は世界の多くの地域にさまざま形で存在していました。日本と例外ではなく、能の「隅田川」や森鷗外の「山椒大夫」を見れば日本にも奴隸制や人身売買があつたことが分かります。

けれども、こんにち「奴隸」という単語を聞くと、多くの人は、アフリカの黒人が大西洋を越えて南北アメリカ大陸やカリブ・西インド諸島の植民地に運ばれた「大西洋奴隸貿易」によって奴隸化された人々のことを思い浮かべることが多いのではないかでしょう。それは、この貿易がかつていくつかのヨーロッパ諸国による大規模かつ組織的な国家事業として行われていたことと関係しています。当時植民地だったこれらの地域では現在、奴隸だった人々の末裔が大勢暮らしていて、いまだに人種差別をはじめとするさまざまな問題が根強く残つてお

り、時としてなにかのきっかけで社会・国全体を大きく揺るがすことがあるからです。この点、今日のバルバドスでは黒人人口が圧倒的多数を占めており、むかし支配層であった白人たちは小さいコミュニティーに固まつてむしろ遠慮がちに暮らしている

ので、黒人に対する人種差別などが問題になることはほとんどありません。けれども、どの国でも過去の歴史がその国の今に投影されているのと同様に、奴隸制の存在というパラバドスの過去が、現在のこの国のある方や人々の行動様式に影響を残していることは否定できません。

大西洋奴隸貿易の実態

大西洋奴隸貿易は16世紀にポルトガル人、続いてスペイン人によって本格化されました。彼らは安価なヨーロッパ産品をアフリカ西岸地域に輸出し、そこで黒人奴隸を手に入れました（註2）。この人たちを西インド諸島、南北アメリカ大陸の植民地に「輸出」し、そこで交換した鉱物や農産物をヨーロッパに持つて帰るということを始めたのです。

黒人奴隸は植民地の鉱山やプランテーションでの労働力として使役されました。その背景としては、当初ボルトガル、スペインの植民地で働かされていた先住民（ネイティブ・アメリカン）が労働現場での酷使、劣悪な環境や、ヨーロッパから持ち込まれたインフルエンザ、天然痘といった伝染病で激減し、労働力が不足するようになつたことが挙げられます。

17世紀に入つてポルトガル、スペインが大西洋の制海権をしだいに失つてくると、新興のイギリス、フランス、オランダ、さらにデンマークやスウェーデンといった国ま

でが奴隸貿易に手を染めるようになります。大西洋奴隸貿易は19世紀まで、300年西暦1500年から1870年までの間、アフリカ西海岸から南北米に1000万、中米には450万の黒人が奴隸として運ばれたという記載があります。合計1000万人ですが、いろいろな資料を比べてみると、筆者には大体そのくらいが当たらずとも遠からずの数字なのではないかと思われます（註3）。

月はかかるいました。この間、船底にすし詰めにされた人々のうち、かなりの割合

（一説では2～3割）が劣悪な環境の下、病気や衰弱によつて命を落とし、遺体は海上に投げ捨てられていました。だから実際にアフリカから拉致された人の数は、目的地に生きてたどり着き奴隸化された人数より



# APIC早朝国際情勢講演会

## 令和6年度 (2024年度)

(令和6年7月1日～  
令和7年6月30日まで)

### 事業報告書

【簡略版】

※本誌では簡略版を掲載しています。詳細につきましてはAPICホームページをご覧ください。



毎月1回（8月以外）開催

されるAPIC早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。

現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰國中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。

新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、2021年5月からはオンラインでの配信も開始しました。現在は会場・オンライン同時配信で開催しております。

本講演のご案内は、APIC維持会員の皆様にお送りしております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しておりますAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

本講演のご案内は、APIC維持会員の皆様にお送りしております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しておりますAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

### 講師・演題一覧 (2025年7月～12月実施分)

#### 【第419回早朝国際情勢講演会】

日時：令和7年7月17日(木)  
講師：外務審議官(経済) 赤堀毅氏  
演題：「G7サミットと日本の経済外交」

#### 【第420回早朝国際情勢講演会】

日時：令和7年9月18日(木)  
講師：外務省国際法局長 中村和彦氏  
演題：「国際社会の転換期における法の支配と日本」

#### 【第421回早朝国際情勢講演会】

日時：令和7年10月16日(木)  
講師：外務省アジア大洋州局長 金井正彰氏  
演題：「最近のアジア情勢と日本の外交：中国、韓国、北朝鮮」

#### 【第422回早朝国際情勢講演会】

日時：令和7年11月20日(木)  
講師：外務省軍縮不拡散・科学部長 中村仁威氏  
演題：「分断を超えるルールメイキング～AI、宇宙、核軍縮～」

#### 【第423回早朝国際情勢講演会】

日時：令和7年12月18日(木)  
講師：外務省アフリカ部長 今福孝男氏  
演題：「TICAD9の成果と今後の日本外交」

1. 太平洋島嶼国開発協力事業

(1) 太平洋諸国・大学生招待計画【継続】  
毎年7月(注)に太平洋諸国から日本や東アジアに関心を有する数名の大学生を招待し、東アジア研究に関する上智大学の短期プログラム Summer Session in Japanese Studiesに参加させるとともにAPIC独自の事業として週末に日本文化や観光を体験する機会を与えてきた。

本年度は太平洋からは、5名(フィジー、ソロモン諸島、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島)の学生を招待した。APICが提供する週末のプログラムとして、6月28日は都内観光を行い、オーブントップバスツアー、江戸切子体験、浅草を訪問、7月6日は横浜で、日本郵船川丸、横浜中華街、カップヌードルミュージアム、コスマワールドなどを訪問、13日は株式会社エヌアイディーの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れ、千葉県立佐原高等学校の生徒たちと昼食を共にした後、一緒に香取神宮を参拝して交流を行った。その後、「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(2) 太平洋諸国・記者招待計画【継続】  
毎年10月頃に(公財)フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施しているもので、太平洋とカリブの有力若手有望記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー分野の取り組みについて理解を深めてもらい、我が国の現状についての広報をそれぞれの国で行つてもらおうとするものである。プログラム・コーディネーターとして、フロイド・タケウチ氏とドーン・マタス氏の2名にも本計画に参画してもらうと共に、本年度は、太平洋からは記者4名(フィジー、マーシャル、サモア、バヌアツ)を招待した。

内容としては、都内においては、外務省でアジア大洋州局大洋州課と中南米局カリブ室から記者の出身国と日本との関係等について、東京都で東京スパークエコタウン事業について、高俊興業株式会社で産業廻りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(3) 太平洋諸国・リーダー招待計画【継続】  
毎年10月頃に(公財)フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施しているもので、太平洋とカリブの有力若手有望記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー分野の取り組みについて理解を深めてもらい、我が国の現状についての広報をそれぞれの国で行つてもらおうとするものである。プログラム・コーディネーターとして、フロイド・タケウチ氏とドーン・マタス氏の2名にも本計画に参画してもらうと共に、本年度は、太平洋からは記者4名(フィジー、マーシャル、サモア、バヌアツ)を招待した。

内容としては、都内においては、外務省でアジア大洋州局大洋州課と中南米局カリブ室から記者の出身国と日本との関係等について、東京都で東京スパークエコタウン事業について、高俊興業株式会社で産業廻りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(4) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(5) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(6) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(7) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(8) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(9) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(10) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(11) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(12) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(13) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(14) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(15) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(16) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(17) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定)に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたと高い評価を得ている。

(注)2020年までは1月のJanuary Sessionに参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionが再開。

(18) 太平洋諸国・環境セミナー【延期】  
2015年7月に上智大学と共に開催された「佐原の大祭 夏祭り」(関東三天山車祭りの



## APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には、毎月開催される外務省幹部・大使等による

**APIC 早朝国際情勢講演会**へのご案内をお送りしております。

詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

**場 所** The Okura Tokyo 会議場

**時 間** 午前 8:30 ~ 10:00 (朝食付き)

**お問い合わせ** TEL: 03-5577-2900

EMAIL: apicinfo@apic.or.jp

令和 8 年 1 月 1 日 発行

■ 発行人 重家 俊範

■ 発行所 一般財団法人 国際協力推進協会 (APIC)

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 6-12 紀尾井町福田家ビル 3 階

TEL: 03-5577-2900 FAX: 03-5577-2901

URL: <http://www.apic.or.jp/>

■ 編 集 APIC 事務局

ISBN 978-4-911723-23-4



JAPAN 一般財団法人  
国際協力推進協会

Association for Promotion of International Cooperation